仲哀天皇 恵我長野西陵鳥居改築工事に伴う立会調査

仲哀天皇恵我長野西陵は、大阪府藤井寺市藤井寺４丁目に所在する前方後円墳で、「岡ミサンザイ古墳」とも呼ばれる。墳丘主軸を南南西－北北東方向に持ち、その規模は、墳長242m、後円部径148m、同高19.5m、前方部幅182m、同長120m、同高16mで、周濠や外堤も含めた総長は410mとされる大型墳である(1)(第55図)。３段築成とされる墳丘は等高線の乱れが顕著であり、中世に城郭として使用されたものと考えられている(2)。周囲には、墳長約60mの前方後円墳である鉢塚古墳、径約20mの円墳である落塚古墳、一辺約30mの方墳である岡古墳、同規模で隣接する割塚古墳などが所在しているが、このうち墳丘主軸の延長線上に所在する鉢塚古墳、落塚古墳はその位置関係から本陵の陪冢と推定する向きもある(3)。なお、南から東南にかけての一帯は、旧石器時代および古墳時代から中世にかけての複合遺跡であるはざみ山遺跡の範囲に含まれる。

本陵に関わる調査事例については本誌第52号に詳しいので参照されたい(4)。

今回の調査は、拝所内に所在する木造鳥居を石造へ改築する工事に際し行ったものである。掘削は鳥居の基礎部分２箇所で行われ、その規模は、東側が長さ2.4m×幅2.2m×深さ1.4m、西側が長さ2.6m×幅2.3m×深さ1.5mであった（第56図)。調査期間は平成18年１月12日～28日である。

掘削箇所における土層は３層に大別される（第57図)。Ⅰ層は拝所の整備にかかわる土層を一括したもので、表面に敷かれる白砂や、整地した際の盛土層などからなる。Ⅱ層は旧鳥居の基礎掘方の埋土で、次に述べるⅢ層を掘り返して埋め戻したものである。Ⅲ層は、暗灰色・黄灰色・青灰色・黄褐色などを呈する締まりの強い粘質土からなる土層である。

遺物は21点ほど出土しているが、３点の陶器片以外は埴輪片である。埴輪片は各層に散漫に包含されており、現位置を推定させるような出土状況ではなかった。

埴輪片のうち大振りなものを図示した（第58図)。突帯の残るものは断面がしっかりとした台形をなし、外面調整を観察できるものはヨコハケもしくはタテハケである。胎土中には径３㎜以下の砂礫が目立つ。いずれも赤橙色を呈し、堅緻な焼き上がりで窖窯焼成である。これらの特徴は従前の調査における本陵出土品の範疇に含まれるものである。

本陵の外堤は過去の調査によって本来の外堤上に後世の大がかりな盛土によりかさ上げが行われていることが明らかとなっているが、今回の掘削範囲は、その土層の状況および埴輪の混在状況から、後世のかさ上げ部分内にとどまるものと判断された。

以上、保存を必要とする遺構の確認はなく、工事は予定通りに施工された。　　（有馬　伸）

註

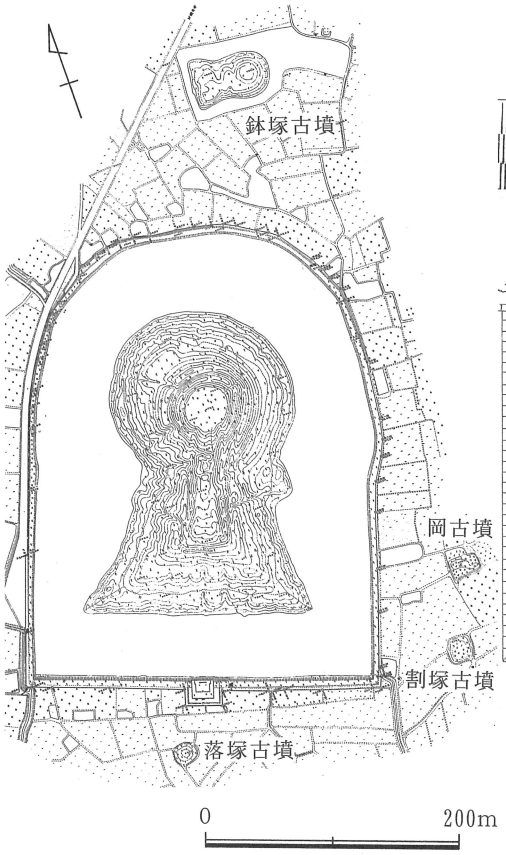
（１）　天野末喜「岡ミサンザイ古墳(伝仲哀天皇陵古墳)」近藤義郎編『前方後円墳集成』近畿編、山川出版社、1992年。

（２）　村田修三「『陵墓』と築城」日本史研究会・京都民科歴史部会編『「陵墓」からみた日本史』、青木書店、1995年。

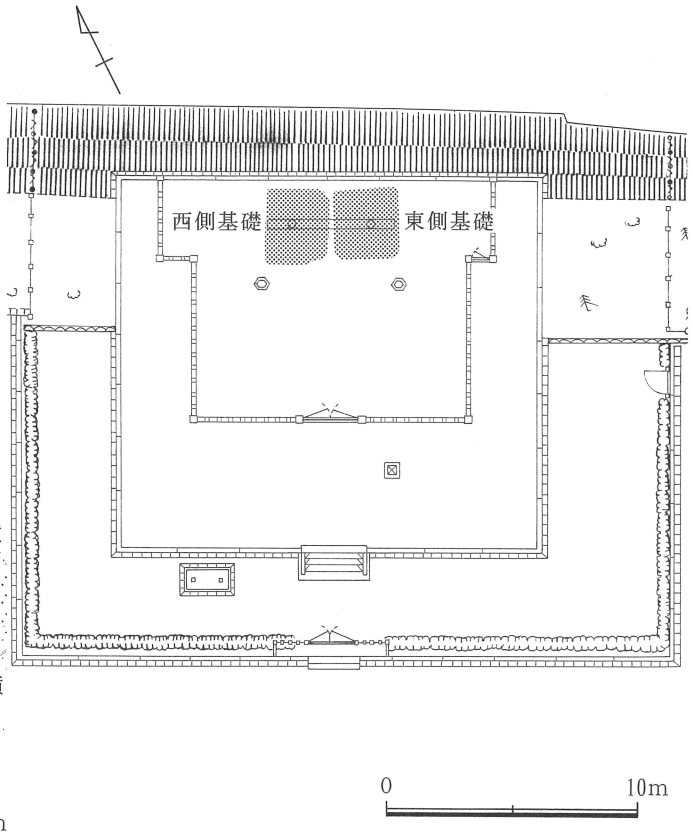
福尾正彦・清喜裕二「恵我長野西陵整備工事区域の調査」『書陵部紀要』第49号、宮内庁書陵部、1998年。

（３）　中西康裕「鉢塚(鉢山)古墳と落塚(北ノ平)古墳」『新版　古市古墳群』、藤井寺市教育委員会、1993年。

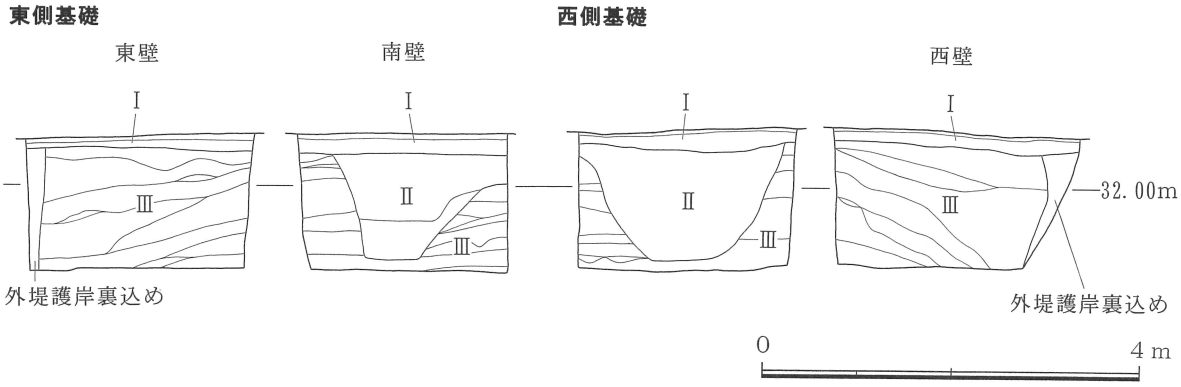
（４）　福尾正彦「仲哀天皇　恵我長野西陵汚水桝取設箇所の調査」『書陵部紀要』第52号、宮内庁書陵部、2001年。



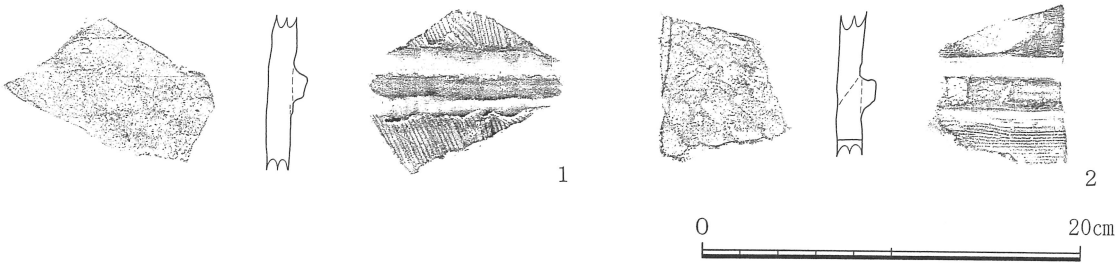
第55図　恵我長野西陵
地形図（旧状）（1/6000）



第56図　恵我長野西陵　掘削箇所位置図（1/300）



第57図　恵我長野西陵　掘削箇所断面図（1/80）



第58図　恵我長野西陵　出土品実測図（1/4）